

これも今は昔、山の横川よかわに、賀能ち院といふ僧、破壊無慚の者にて、昼夜に仏の物をとり遣ふことをのみしけり。横川の執行にてありけり。政所へ行とて、塔のもとを常にすぎありきければ、塔のもとに、ふるき地蔵の、物のなかに捨て置きたるを、きと見たてまつりて、時々、きぬかぶりしたるをうちぬぎ、頭をかたぶけて、すこしすこしうやまひおがみつゝゆく時も有りけり。かゝる程に、かの賀能、はかなく失せぬ。師そうずの僧都、これを聞きて、「かの僧、破壊無慚の者にて、後世さだめて地獄におちん事、うたがひなし」と心うがり、あはれみ給ふ事かぎりなし。

かかる程に、「塔のもとの地蔵こそ、この程みえ給はね。いかなることにか」と、院内の人々いひあひたり。「人の修理し奉らんとて、とり奉たるにや」など言ひけるほどに、この僧都の夢に見給ふやう、「この地蔵の見え給はぬは、いかなることぞ」と尋ね給ふに、かたはらに僧ありていはく、「この地蔵菩薩、はやう、賀能ち院が、無間地獄におちしその日、やがてたすけんとして、あひ具して入り給ひたるぞ」といふ。夢心ちにいとあさましくて、「いかにして、さる罪人には具して入り給ひたるぞ」と問ひ給へば、「塔のもとを常にすぐるに、地蔵を見やり申して、時々おがみ奉りし故なり」とこたふ。夢さめてのち、みづから塔のもとへおはして見給ふに、地蔵まことに見え給はず。

さは、此僧に誠に具しておはしたるにやとおほす程に、其後、又、僧都の夢に見給ふやう、塔のもとにおはしてみ給へば、この地蔵立ち給ひたり。「是はうせさせ給ひし地蔵、いかにして出で来給ひたるぞ」とのたまへば、又人のいふやう、「賀能具して地獄へいりて、たすけて帰り給へるなり。されば御足の焼け給へるなり」といふ。御足を見給へば、まことに御足くろう焼給ひたり。夢心ちに、哀れにあさましき事かぎりなし。

さて夢さめて、涙とまらずして、いそぎおはして、塔の許を見給へば、うつゝにも、地蔵たち給へり。御足を見れば、誠に焼け給へり。これを見給ふに、あはれにかなしきことかぎりなし。さて、泣く泣くこの地蔵を、いただき出し奉り給ひてけり。今におはします。二尺五寸ばかりのほどにこそと、人は語りし。

是語りける人は、おがみ奉りけるとぞ。